

個性ある活動。豊かな環境づくり。

熊本らしい「潤い」のある文化を目指して、県内各地で様々な動きが起きています。個性溢れる活動や試み。そのための施設づくり。新しい文化の芽が、いま、着々と育っています。

世界に羽ばたく「熊本ユースオーケストラ」

創立二十周年を迎えた熊本ユースオーケストラ。八年前、日本代表として、イギリスの国際ユースオーケ



ストラ・フェスティバルに参加した際、「ユースの世界ベスト5」に入ると、高い評価を受けました。

その熊本ユースが、この夏、ヨーロッパへ出発。各地で演奏旅行を行いました。予想を上回る人気で、しかも、各地のユースオーケストラからは、熊本で公演したいという申し込みが相ついでに届きました。目ざましい活動を続ける熊本ユースについて、事務局長の猪本さんは次のように語ってくれました。「二十年前、熊本で音楽関係の仕事に携わっていた人たちが、音楽を通して少しでも社会に貢献したいと願って結成したのが、

「彫刻のある街づくり」に取り組む長洲町。

長洲町では、港広場、駅前駐車場役場、文化センターなど、人の集まる公共施設に行く、大きな石の彫刻を見ることが出来ます。「和」「波」「飛躍」……と題されたそれぞれの彫刻は、際立って目立つほどではありませんが、町の景観の中にすっかりとけ込んでいます。感じます。どんな著名な作家



町役場玄関前

のものかと思われるこの彫刻、実は大牟田、荒尾、長洲を中心とした高校の美術の先生や彫刻を趣味とする方々のグループ（大牟田彫刻研究会）が共同で製作したものだということです。四年前、この彫刻研究会から長洲町に「公共スペースを利用して、町の文化的イメージアップを図って



海洋センター広場

は、材料費のみのわずか二百万円。「抽象的なものが多いのは、みなさんがそれぞれのイメージで見ることができるようになっています。のねらいです。



駅前駐車場

彫刻研究会が、製作、運搬据え付けを無料奉仕。町は材料費と設置後の彫刻の管理を負担ということで合意。昭和五十六年から三か年かけて計八基（石彫六基、木彫二基）の彫刻が町の施設や広場に設置されました。どれも、製作にあたっては町側との綿密な打ち合わせを行い、会員が半年から一年もかかり、汗みれになって作った力作を誇っています。

大型イベントに備え、文化施設も充実。明日にのびる新しいパワー

県内には、このところ美術館、伝統工芸館、県立劇場といった文化施設が相次いで建設されています。また、来年の秋には、近代文学館を併設した新しい県立図書館（蔵書目標百万冊）もオープンする予定です。

このユースの始まりです。それが、今では団員八十五名を抱える大所帯になっています。

団員の最年少は小学三年生、高校生が主力を占めます。全員集まったの練習は、毎週土曜日の夜。各自、家庭でも熱心に練習しています。今後の抱負としては、一つは、個性豊かな団員で組織されるオーケストラ団員の中で、音楽面だけでなく、良き社会人を育てていくこと。もう一つは、県内各地で演奏会を行い、地域の音楽グループと交流を深めていくことです。

ただこの場合、移動の経費がかさむのも事実で、地方の文化活動を支える基金創設などが必要な時期にきているようです。

県立劇場をよく利用しますが、素晴らしい設備ですね。しかし、県民が使いこなしているかどうか。か疑問です。会議室やリハール室をもっと気軽に活用するよう

今後は、これらの文化施設を有効に活用していきたいものです。

ところで、こうした施設を会場として、来年秋に、「日本文化デザイン会議」が、大分県と共同で開催されることが決まりました。

「八十年代の社会をどのようにデザインしていくかが、二十一世紀の日本社会のあり方を基礎づける」という認識のもとに誕生したこの会議。八十年の横浜会議を皮切りに、仙台、金沢、神戸と続き、今年札幌で開催されました。会議のメンバーは、現在活躍中の人文学者、自然科学者、作家、評論家、建築家、演出家など八十数名にのぼります。札幌の会議では、「交流から創造へ」をテーマに、北の時代へ」をメインテーマに、北海道の特徴を生かした二十九ものテーマがとりあげられました。一般参加者も延べ一万五百人に及び、一大イベントとして成功を納めたそうです。熊本でも「潤い」を基調に熊

本らしいテーマが設定される予定です。

また、県では、大都会に比べ接する機会の少ない洗練された芸術や文化行事、例えば、文化庁が催す芸術祭なども今後積極的に誘致していく方針です。これらの機会を大いに利用し、みんなで豊かな文化を育てていきたいと思います。

（環境文化企画室）



ヨーロッパ公演のひとつ、ハイデルベルグ友好コンサート(市の公会堂にて)

にならないと、本当に機能しているとはいえないと思います。」